

辻邦生さんへの最後の手紙

拝啓 辻邦生先生

夏空に蝉時雨が降りしきり、たゆたうような熱れた光が満ちわたっています。

澄んだ、透明な夏の光に照り映える木々の緑を眺めていると、初めて先生の作品にふれた一九歳の頃を思い出します。実際の季節は春でしたけれど、そこには夏への予感が燃え立つばかりに息づいていました。

頃は図書館で『晋教者ユリアヌス』を借りた日のことを、古い日本家屋を移築してつくった行きつけの喫茶店で、この本を開きました。読みすすむうちに、まわりの客や店員の姿もアールブルも消え、コーヒーカープも消えました。時間もなにもかもが消え、憂鬱に満ちたローマの光だけが一面に氾濫していました。その華やきの光に包まれて、ぼくは本に没入し、気がつくとも閉店時間になっていました。

その無類の面白さでさることながら、ぼくはこの本を読んで、小説というものが、たんなる娯楽、あるいは知識を与えるものではなく、死や滅びといった避けられぬ運命から、いかにして人間が「生」を救済し、肯定し、愛しうるかという問いかけに力強い手がかりを与えてくれるものだということとを初めて深く納得しました。それは恩寵ともいうべき浄福の感覚でした。

それから四年後の春、先生に初めて手紙を書きました。小さな出版社でアルバイトをしていたぼくは、原稿依頼の仕事にからめて、ほとんどファンレターのような長い

手紙を出しました。先生に「こんなすこい手紙をもらったのは初めてだよ、ぼくよりよく書けてる」などといわれて、ぼくは有頂天になりました。

それがきっかけで、ぼくは学習院大学の先生の研究室にちよちよくおじゃまするようになりました。先生の部屋は、悩みの相談にきた女子学生や、仕事の打ち合わせにきた編集者など、いつもにぎわっていました。その頃、先生は五〇代後半で、すでに『ユリアヌス』や『春の戴冠』『樹の声の海』といった数々の傑作を世に問うており、小説家として脂ののりきった時期であり、でも、芸術家になりがちな皮肉さ、頑固さ、とっつきにくさなどは無縁で、ぼくの語る神秘思想家や音楽やマンガなどの話に熱心に耳を傾け、驚いたり、感心したり、大笑いしてくださったりましたね。

けれども、一方でぼくには、そんな先生の天才無難な朗らかさが不思議でなりませんでした。なにを創り出す仕事をする以上、いらだつたり、不寛容になったりするこはしないのか。すると先生は「ぼくは書いていないときは透明人間のような存在なんだよ」とおっしゃいました。「ちよちよ俳優が舞台から下りると何者でもなくなってしまうように、ぼくも日常生活の中ではゼロの存在なんだ。そうすることによって、小説を書くことができ、その中に集中的に没入して生きているときに、小説から出ると、透明人間になってしまうんだ。(笑)」

ぼくは深く納得しました。日常生活で遠

明だからこそ、人と会ったり、話したり、散歩したりといったささやかな営為の一つひとつが生る喜びしさの表われとして、深い味わいをもたらす。そのようなまなざしには、死や孤独、嘆きや絶望、不幸や悲惨といったものさへも、地上の生という奇跡の中に生じた「神のなるもの」の表われとして映る。だが、そのためには、日常生活の外側に超出し、世界をあかま丸く閉じられた奇跡の球のよに眺める必要がある。

のちに、先生が初めてパリ滞在中に書かれた膨大な日記を読んで、そうしたまなざしを得るためにどれほど深い精神的彷徨を経てきたかを知り、めまいがする思いがしたものです。だからこそ、ぼくは先生の朗らかさや優しさが好きでした。その笑顔にふれると、空をゆく雲や、道ばたに咲く花や、頬をなでる風が、たしかにかけがえない存在の奇跡として感じられました。

生きているということがそれだけですばらしいことだと信じられました。それは作品からも伝わってことですけれど、じつさいの人の柄にふれることによつて、いっそうたしかなものとなりました。

一九八五年、最初のアフリカへの長い旅に出ることになった。じつは先生に示唆された存在の感覚を、自分の中でじっくり深め、手応えのある確たる実体としてつかみ取ったからです。旅立つにあたって先生は「とにかく何でもいからメロシなさ」といっていました。「砂の流れる音でも、風の音でも何でもいい。とにかく記述するんだよ。体験したんだから書かなくていい。ってのはちがうんだ。そうじゃなくて、書いたことだけが現実になるんだからね」



でも、先生には会えなくなり、話したり、散らしたり、おそそ一カ月前の夏の日、先生は軽井沢で突然倒れ、そのままこの世を去られました。

告別式の朝は、夏の新鮮な光にあふれていました。光は豊かな葉むらしを透かして、すがすがしい高原の気分のなかに満ちわたっていました。いかにも先生にふさわしい美しい夏の朝でした。

密葬とのことで、参列者は多くはなかったけれど、そのとき初めてぼくは先生と自分との関係が仕事や利害関係と、いさ

い無縁な、純粹に個人的なものであったことに気づきました。いつてみれば、最後まで

を一年にもわたって何かにつけて心配し、好意的に励ましつづけてくれた先生がもういない、そのやや舌足らずな、朗らかな声がもう聞けない、そしてなにより、

先生に手紙を書けない、封筒の宛名に辻邦生先生と書くこともできないのだと思うと、無限のさびしさをおぼえます。

しかし、その死は突然であるにもかかわらず、なぜか、そこにはすばらしい生が、大きな円を描いてみごとく完結したような印象をおぼえたのも事実です。とても悲しいのだけれど、その悲しみに射すような痛みをかけた熱し、大地に還つていったような安らかなささおぼえたものです。

山荘の庭で、先生がいつも目にしていた

向かうことに決めました。一九九〇年の冬でした。出発前、先生は奥さまと親しい編集者といっしょに、赤坂のイタリアン・レストランで壮行会をしてくれましたね。カイロに居を落すつてからも、折々に先生に旅先から手紙を書き送りました。ザイル川を丸木舟で下ったときの写真を送ると、しばらくして返事をくださいました。「河のそばのお二人のお写真は家が長く飾ってありました。まるで青春のシンボルのように美しかったです」と、いつもと同じ太めの茶色いマーカーで、やや右に傾いだ、幅広の字で書かれていました。

一九九五年の夏、一時帰国したときに、久しぶりに先生にお目にかかりましたね。ちょうど大作『西行花伝』を出されたばかりでした。先生は七〇歳近かったのに、その若々しい晴れやかな笑顔は少しも変わらず、しゃれたエーモアのセンスにはますます磨きがかかり、小説にたいしてはいっそう精力的で、ぼくのほうが羨ましくなるほどでした。

その後、旅先から手紙を出すくらいで、雑事にかまけて帰国するまで先生と連絡をとりませんでした。帰国してからもしばらくは精神的にけっこうまいっていて、そんな状態のときに、先生に会うのは失礼だと勝手に思いこんでいたのです。

八年ぶりの帰国から一年近かった昨年